2018年6月号（毎月20日発売）5月20日発売　第53巻　第6号（通巻503号）

6 June 2018

青春と読書

Seishun to Dokusho

本の数だけ、人生がある。——集英社の読書情報誌

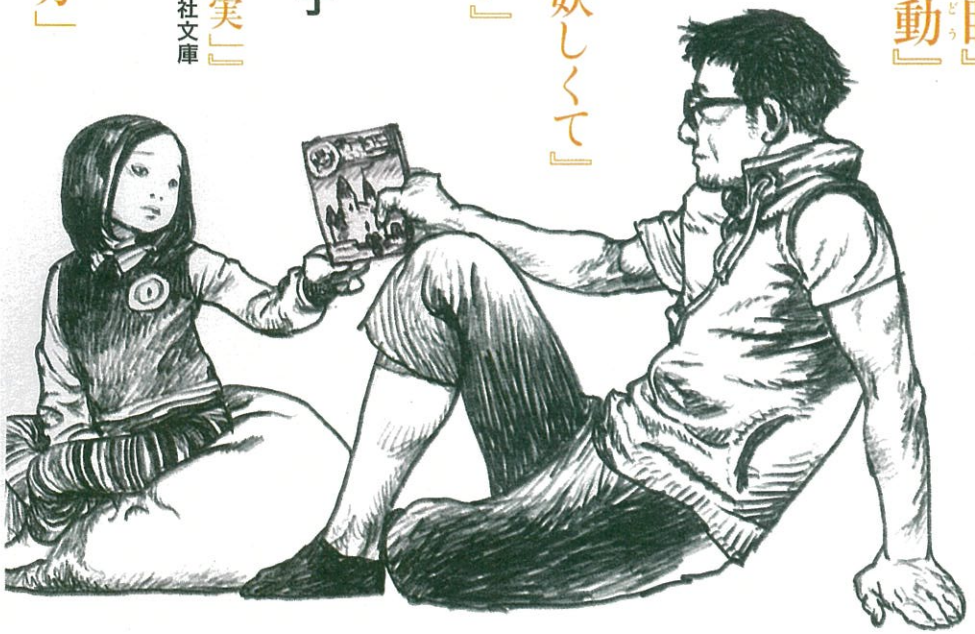
定期購読募集中

特集 北方謙三
『チンギス紀 一 火眼』
『チンギス紀 二 鳴動』
著者インタビュー ほか

インタビュー 阿刀田高『怪しくて妖しくて』
椎名誠『旅先のオバケ』

対談 浜辺祐一×上野千鶴子
浜辺祐一『救命センター「カルテの真実」』
集英社文庫

新連載 下重暁子「潔い負け方」



本を読む

鹿島茂

『ここから始まる 人生100年時代の男と女』
蜷川有紀、猪瀬直樹 著

日本に最も欠けているのは「恋する日常」

事務所が同じ西麻布にある関係でジョギングしている猪瀬直樹さんの姿をよく見かける。都知事時代も辞職後の不遇時代も、自分で自分に課した規律を守ることを第一義に考える人らしく、苦しげな表情でひたすら前に向かって走り続けている。

猪瀬さんとは『ペルソナ　三島由紀夫伝』の書評を書いて以来の仲だが、そんな猪瀬さんがオリンピック招致活動中に最愛の奥さんを亡くされ、その後、都知事を辞任して「振り出しに戻る」かたちで物書き稼業を再開されたというので一度飲みに誘おうかと思っていた矢先、西麻布の中華料理店で隣席になった。画家・女優の蜷川有紀さんとご一緒だったが、二人の馴れ初めについてはまったく尋ねなかった。それが本書で完全に明かされることになったのだ。

愛妻に先立たれたばかりか公的にすべてを失った六十六歳の男が、三年後に亡くした妻と誕生日も血液型も同じ女性と出会って一目惚れし、「人生には終りだけではなく、どこかでいつでも始まりが用意されている」と感じて恋愛へと突き進んでいく。そんなストーリーが対談（第一部）とその間の事情を綴った蜷川有紀さんの日記（第二部）によって描かれる二部構成の本だが、読者にとって参考になるのは蜷川有紀さんの次の言葉だろう。

「ふつうの男性にとって、妻はいつの間にか日常になってしまう。（中略）ところが、猪瀬さんは違う。（中略）猪瀬さんの肩に奥様がもたれかかっている写真が掲載されていますが、パッと見ただけでお二人の愛情や信頼関係が伝わってくる。こういう関係性を維持できるのは、猪瀬さんがとても率直だから？　猪瀬さんをひと言で言えば〝少年〟。子どものような率直さを少しも失っていないのよ」

有紀さんの言う「関係性」を猪瀬さんは「恋する日常」と呼び、それが有紀さんを口説き落とす決め手となったようだが、日本に最も欠けているものこそこの「恋する日常」なのではないだろうか？　人生百年となった二十一世紀において一つの指針となるような本である。

かしま・しげる●仏文学者、明治大学教授

発売中・単行本
本体1,400円＋税